

京都市産業技術研究所
magazine

特集

拡げる

vol.
02

先進産業に伝統技術を活用 次の世代に選ばれるビジネスへ

佐々木化学薬品株式会社 代表取締役 佐々木 智一 氏・研究開発部責任者 高田 慎一 氏

薬品の問屋から研究開発企業へ、そして金属表面処理からライフサイエンスへ。昭和21年の創業以来、時代に合せて常に事業を変化させ続けてきた佐々木化学薬品。どのような考えで社外との連携を拡げてきたのか、これまでの経緯や想いをお二人に伺いました。

POINT

- 産学連携や顧問契約等を通じて、外部人材の知識や考え方を吸収し、会社を成長させる
- 産技研との共同開発で、初めて検査機器の製造に挑戦し、バイオ事業へ展開
- 動物実験の代わりに、酵母を使って病原菌の抗体をつくるなどの伝統と先進を掛け合わせたイノベーション

ないものだらけで始まったので、オープンになるしかなかったんです

—— 外部との連携を積極的にされている理由は？

弊社は元々薬品の問屋でした。その頃の薬品問屋といえば、繊維業界で染料を売るのが主流でした。そんな中、弊社は他社が行っていなかった大学関係への研究用薬品の卸を始め、独自の路線で商売を切り拓いてきました。先代である父が会社に残したのは、「オリジナル商品の開発は自分にはできなかった」という言葉でした。その思いを受け継いで「研究開発企業になろう」と考えたのです。

しかし、社内を見回してもリソースが全く足りなくて。研究開発には、ものづくりやマーケティングの知見が必要ですよ。ないものだらけでした。こうなったら、社外の人材から教えてもらうしかないと考え、産学連携や顧問契約というかたちで関係性をつくっていきました。

部分的なノウハウだけでなく、組織づくりや経営についても指導をいただいて、経営者としての自分のクセにも気づかせてもらいましたね。私も社員も、外部に対して、オープンになることでレベルの高い知識や考え方を吸収して、成長することができたと思います。

—— 産学連携にも取り組んでおられますよね。

京都大学との産学連携をきっかけに高田をはじめとして、社員を2年間大学院に派遣し、研究してもらいました。大学の先生から「学生に研究させてデータを渡すことはできるけれど、それだと御社にはスキルも人脈も残らないよ」とアドバイスいただいたことが、とても大切なきっかけとなり、ありがたかったです。そのおかげで、社員が大学でスキルを学び、人脈を作って持ち帰ってくれました。高田のように研究はもちろん、対外的な事業の拡張を担ってくれています。社長の人脈とは別に、実務の現場での人脈形成も大事です。

—— バイオ分野での共同研究に産技研も参画させていただきました。

そうですね。産技研と共同開発した、食品の安全性を検査する「微生物簡易検査システム バイオスカウター」(写真：下中央)も、共同研究先の京都大学との出会いが一つのきっかけです。弊社にとって初めての機器の開発。国の事業としても採択され、大きな一歩になりました。

本社(京都市)



バイオスカウター



左 高田 慎一 氏 右 佐々木 智一 氏





本社実験室内にて 左 高田氏 右 佐々木氏

伝統の技術と先進産業を掛け合わせる、京都らしいイノベーション

—— 金属の表面処理からバイオの分野へ進出された、きっかけは？

現状の主力商品は、産技研にも支援いただいた金属のリユースにつながる技術を使った表面処理の薬品です。しかし、環境保全や人体への影響が重視される時代にあって、今後の事業展開を見極めると、ライフサイエンスは間違いなく今から成長する産業ですし、これまで培ってきた薬品、つまり「液体」を扱う知見を活かせると考えました。

例えば、動物実験の代わりに酵母を使って、病原菌の抗体をつくる研究をしています。この方法だと、動物の命を犠牲にすることなく、コストも削減できるんです。酵母は酒造りに使われている伝統技術です。こういった伝統技術と先進産業を掛け合わせるイノベーションは、とても京都らしいですね。

少子高齢化が進めば、必ず予防医学の重要性が高まっていきます。低コストで抗体をつくれるようになれば、たくさんの方の健康に貢献できるはず。治療はもちろん、診断にも活かせる開発をしていきたいですね。

—— 佐々木さんは常に視点を広く持って、社会にとって何が幸せかを考えておられますよね。

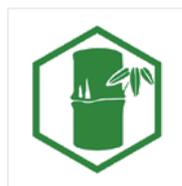
今の10代、20代の若者が考えるビジネスモデルは、当たり前のように社会課題解決が前提になっています。若者たちは、これまでのトレードオフのやり方ではなく、持続可能性を大事にしながら利益を出すことを目指している。いつまでも従来のビジネスを続けていたら、働く場としても取引先としても次の世代に選ばれなくなっていくという危機感を持っています。

—— 会社が変わっていく時には、困難や摩擦がつきものだと思います。どのように乗り越えてこられたのでしょうか？

僕の性格として、反対する人がいた方が嬉しいんですよ。産学連携を始めた時も、社内では反対の声が多かったです。むしろ、皆に賛成されると不安になります。多くの人が気づいているなら、もうビジネスチャンスにはならないので。

経営は「変化対応業」です。だから、常に変化する世の中に対して会社は常に“ないものだらけ”。以前は、助成金に応募しても落ち続けていました。初めて通った時はもう、大喜びでした。“ないもの”をそのままにして終わるのか、なんとかして“ないもの”を外に取りに行くかで、その先が変わってくる。色々な人や機関とのつながりで、我々に足りないものを各分野のスペシャリストが補ってくださいました。産技研には技術のスペシャリストが揃っている。頼もしいです。今後も産技研をはじめ皆さんのお力を借りながら、我々の可能性を上げていければと思います。

—— 産技研も引き続き企業の技術サポートに取り組んでいきます。ありがとうございます。



佐々木化学薬品株式会社

化学薬品製造・販売

京都市山科区勤修寺

西北出町68番地



Web

平成元年度 知恵創出“目の輝き”認定企業 →



つながりから、拡がりが生まれる

平成25年度に始まった「知恵創出"目の輝き"認定制度」は、産技研が共同研究などの技術支援を行い、「伝統産業と先進技術の融合」や「新たな気づき」といった知恵の創出により、製品化・事業化が実現した企業を認定しています。創設から10年の節目を迎え、認定企業は延べ43社となりました。

産技研では認定企業に対し、継続的に技術的アドバイスや企業PRなどの支援を行っています。今回は認定企業3社を訪問し、現在の事業における挑戦や社外とのつながり、そして今後の拡がりについてお話を伺いました。



写真1 今河織物 NFT 付けん玉のデザイン



写真2 三和化工開発ジョイントマット



写真3 コーティング関連商品



今河織物株式会社

西陣織物メーカー
京都市上京区五辻通七本松西入
東柳町 558



Web

木屋 六

「ちょっとよそにない」ものを

代表取締役 今河 宗一郎 氏

—— 現在、力を入れている製品や技術は？

新しい試みとして、NFTの事業者と協力して自社の帯をデザインしたけん玉をNFT※付きで製作しました(写真1)。西陣織の特徴は「多様性」です。織物以外に、技術、デザイン等、西陣織には様々な要素があります。織物は手に触れることができますが、技術やデザインはそうではありません。今まで出会う事なかった他分野の方とも連携して、新しい価値の生み出し方を模索しています。

これまで西陣ではつくってこなかった、彩度の高い鮮やかな色糸の試作にも挑戦しています。西陣織の製造元として、伝統を守りながらも、お客様のニーズに沿った織物製品や織物意匠の活用を通して、選択肢を増やしていく、その勇気が必要だと感じています。

—— 同業他社との連携にも積極的だと伺いました。

西陣の織元3社で、「N180 (ニシジン・ワンエイティ)」というグループを結成し、「モノづくりの力で業界の閉塞感を180°ひっくり返す」をテーマに活動しています。

イベントを開催したり、SNSを通じて情報発信をしていますが、特にYouTubeではコロナ禍において着物を着る機会が減った方に対して、着物を着ていなくても「着物を楽しむ時間」を提供できたと思っています。これからは新製品のサンプルをお客様に見ただいて意見をもらい、より良いモノづくりができればと考えています。「ちょっとよそにない」ものを提供する会社でありたいです。

※NFTとは 偽造不可能な鑑定書・所有証明書付きのデジタルデータ

令和元年度認定 →





三和化工株式会社

機能性化学（有機・高分子）メーカー
京都市南区上鳥羽仏現寺町56番地



Web



社会の未来は足元にある

代表取締役社長 吉田 典生 氏

—— 現在、力を入れている製品や技術は？

「**エコナフォーム**」です（写真2）。当社は1965年の創業以来、緩衝材に使われるポリエチレンフォームなど、発泡技術を活かしたもののづくりをしてきました。これまでは石油化学由来の原料が主流でしたが、時代に合わせて、環境に配慮した製品開発を進めています。

しかし、植物由来原料はまだ高価なため、普及が難しいというのが現状です。CO2を削減し、コストも削減することを目指し、生産性の向上や材料選定など複数の観点から改善に取り組んでいます。

足元にある今日一日の仕事を一所懸命に取り組む、そうやって明日や未来につなげていかなければならないと思っています。

—— 外部との連携において大事にされていることは？

オンラインでのコミュニケーションは便利ですが、やはり対面の大切さを実感しています。対話の中で質問や提案を重ねていくことで初めて、お客様自身も意識していなかったニーズが浮かび上がってくる。待ちの姿勢ではだめなんです。

成功するか否かは別として、常に新しい挑戦をし続けたいといけませんね。歴史ある業界なので、変化が激しい今、現状の改善ではなく根底から考え直すことが必要だと思います。未来へのビジョンと目の前の課題、双方に真摯に向き合っています。

平成25年度認定 →



ヤマナカヒューテック株式会社

半導体用高純度化学薬品メーカー
京都市左京区下鴨松原町29番地



Web



強みはフットワークの良さ

商品開発Gr 木村 直人 氏

—— 現在、力を入れている製品や技術は？

私たちは、半導体の原料となる化学薬品をつくっています。近年は医療機器や自動運転システムなど、ミスが許されない精密機器のニーズが高まってきました。電子部品の精度を高めるためには、より高純度の原料が必要になります。

お客様との相互の信頼関係がなくては、質の良い製品をつくることはできません。装置メーカーのお客様の製品に納入先でトラブルがあれば、我々も一緒になって解決策を探ります。お互いに学び、成長していける関係性を大事にしています。

—— 社外組織との連携をどのようにいかしていますか？

研究開発はスピード勝負。非粘着コーティング剤「トフマク」の導入など、連携先の技術を掛け合わせて自社の強みを上げていくことも重要です（写真3）。工場が新設され、中小企業ならではのフットワークの良さを活かして、お客様の課題解決にさらに貢献していきたいですね。

今後、社内で培ってきた薬品の分析技術を、サービスとして提供することも考えています。半導体分野など主力分野を確実に押さえていくのと同時に、5年先、10年先を見据えて、周辺分野への事業にも展開できればと考えています。

平成29年度認定 →



地域企業とともに、 博士人材の高度な研究力を社会実装

京都産業大学 生命科学研究所 生命科学部 教授 加藤 啓子 氏

京都産業大学大学院と産技研は、科学技術振興機構（JST）の「次世代研究者挑戦的研究プログラム（SPRING）」に採択された「トランスファラブルスキルを身に付けた科学技術を牽引するリーダーの育成」において、連携協定を締結し、“博士後期課程学生のキャリアパス支援”と“地域企業への就労機会創出”を共に目指します。

トランスファラブルスキルとは 様々な業種や職種で応用できる技術

POINT

- ものづくり企業が世界へ出ていく時、担当者に博士人材を登用し、その高い能力を発揮させることが重要になってくる
- 京都ものづくり協会の会員企業と大学院生との交流イベントやインターンシップ研修を開催し、相互理解を深める
- 地域企業が博士人材を活用することで、新しい発想によるイノベーションが期待できる

企業が世界へ出ていくためには、博士人材が必要なんです

—— 産業が発展する上で、博士人材が活躍できる場所は、どのような点でしょうか。

大学院と産業界をつなぐことで、博士人材が持つ高い能力をもっと社会に活かせると考えています。海外のものづくり企業では、開発部門だけでなく営業職でもたくさんの博士人材が活躍しています。今後、日本企業が世界へ出ていく時に、担当者が博士号を持っていることが大きな力になる場面が増えてくるのではないのでしょうか。

博士課程を出た人材は、何かを深く探究する力はもちろん、複雑な研究内容を文章やプレゼンでわかりやすく伝える力、他者と協力するためのコミュニケーション力、得た知見を様々な場面で活かせる応用力などを身につけています。どれも企業が発展していくために必要なスキルですね。

—— 変化が激しい社会の中で、まさに求められている力ですね。博士人材と企業をつなぐために、産技研と連携協定を結び、いくつかの取組を実施しました。

そうですね。産技研の方につないでいただき、京都ものづくり協会の会員企業と大学院生との交流イベントを産技研と本学で開催しました。学生にとって地域企業の方と接する機会は貴重ですし、ざっくばらんにお話できてとても刺激を受けています。イベントでの交流が参加企業でのインターンシップ研修にもつながり、仕事の現場も経験させていただきましたね。

—— 参加企業からも大学院生の生の声を知ってもらえるいい機会であり、好評でした。

企業マッチング会（令和4年10月21日（金））



同 交流会



京都産業大学 パナー





博士人材の活躍の場を拡げることで、

大学院に進む学生を増やし、産業界のリーダーを育てたい

—— 学生と企業との交流は実現できましたが、何か課題はありましたか？

どうすれば地域の企業に博士人材の価値を認めていただけるか、という点は課題だと感じました。学部卒の生徒より5年も長く研究に打ち込んできた人たちなので、やはりその努力と能力に見合った待遇により迎えてくださるところで活躍してほしいんです。

大企業やグローバル企業は、給与やポジションの面で博士人材を活用する土壌が整っていますが、小規模企業にはそういった制度がないことが多く、採用時の判断が難しいですね。まずは、交流を通じて、学生と企業の双方がお互いの状況や考えを理解することが第一歩だと思っています。

—— 京都には、伝統から先進まで多様なものづくり企業が集積しており、産技研はそれらの企業を支援しています。企業への博士人材の登用で技術的にはどのようなメリットがあると考えられていますか。

例えば、伝統産業には後継者不足などの課題はありますが、逆にチャンスがたくさんありますよね。AIやロボットの活用、他分野への技術の応用など、新しい発想でイノベーションを起こせると思います。海外に発信していく際にも、博士人材のスキルが役立つでしょう。世界にフィールドを拡げていくと、相手の国の博士人材との対話から生まれるアイデアも期待できます。

—— 伝統分野もですが、新しい視点を取り入れることはすべての分野にとっても重要ですね。

京都は、事業の価値をしっかりと意識されている企業が多いですね。単に下請けとして言われたものをつくるのではなく、自分たちにしかできないものを世に提供するという姿勢を感じます。そういう方々と学生が出会えることは、非常にありがたいです。

本学では、「専門性が高く、学際性、国際性にも優れている高い倫理感を持ち合わせた人材」を育てていきたいと考えており、そのためにもより多くの学生が大学院に進学してほしいと考えています。そして、学部生はもとより高校生にも、本学が主催するSPRINGの内容を発信しています。理系だけでなく文系の院生も活躍できる場をSPRINGで提供したいですね。理系文系を問わずに専門性の高い仕事をめざして、地域産業を牽引するリーダーとなる人材を輩出していく土台作りをしていきたい。学生たちに将来の道筋を示すロールモデルを増やすために、企業ネットワークをもつ産技研の方との連携によりこの取組をしっかりと進めていきたいと思っています。

—— 産技研としても、企業と学生のマッチング支援は初めての挑戦です。双方にとってメリットになる取組にしましょう。ありがとうございました。



京都産業大学

京都市北区上賀茂本山

お問い合わせ：
教学センター（大学院担当）

Tel 075-705-1913

Mail daigakuin-jim@star.kyoto-su.ac.jp

月～金 9:00～16:30（13:00～14:00 除く）

※祝日は閉室します



Web

「木造地蔵菩薩坐像」の複製品制作 ～文化をつなげ「拡げる」産技研の取組紹介～

各地域には数々の文化財が存在しています。それらが重要文化財等に指定され、その保存や管理が困難な場合、実物を正しく保存管理できる環境に移設するとともに、複製品を作成するという取組に参画しました。

左京区下鴨松ノ木町の「木造地蔵菩薩坐像」(写真・右)は、地域の人々により大切に祀られてきました。一木造としては最も古風な作風を有し、日本彫刻史上貴重なもので、平成27年に国の重要文化財に指定されました。

複製品制作に至るきっかけと技術検討

平成27年に、本地蔵が国の重要文化財に指定され京都国立博物館に保管されることになりました。地蔵盆には「里帰り」していたものの、防犯や搬送に伴う危険を減らすため、新たな地蔵が必要となりました。そこで、京都市文化財保護課と国立博物館が共同で3Dプリンターによる本地蔵の複製品を制作することとなり、その古色付けに対して、産技研に協力依頼がありました。複製品は、重要文化財に指定された本地蔵に代わって地域に安置されることが決まっており、信仰対象として地域の方々や安置される御堂に違和感なく受け入れられる必要がありました。また、合成樹脂製の塗料などを使用せず、古来より使用されている伝統的な彩色材料(漆、膠、乾性油、フノリ、柿渋等)を使用することが必要でした。

文化財を次代につなげるための技術と研究

古色彩色の実作業については、産技研の伝統産業技術後継者育成研修漆工コースの修了生で漆芸家の中道陽子氏に依頼し、産技研と共同で工程設計を行いました。従来から産技研では、塗料と塗装に関する試験研究業務を行っており、その得意技術を活かして、伝統的彩色材料を樹脂への彩色に応用しました。

一方、古色彩色の作業では、実物を観察しながら作業することができなかったこと、つまり、写真と記憶に頼ることとなり、想像以上に難しい作業となりました。しかし、中道氏の技術と根気で、古色と雰囲気を再現することができました。

日常生活へ技術の意義を拡げる

完成した複製品(写真・左)は平成29年8月に松ノ木町地蔵保存会地蔵堂に安置。地域の方々や関係者が集まる中、開眼法要が行われました。新しい地蔵はこれまでの地蔵と同じように、地域の信仰の対象として受け入れられるとともに、松ノ木町の方々の生活を見守り続けています。文化財保存や文化財と人との関わりについての一つの考え方として意義深いものとなったと思います。

なおこの取組は、国内のみならず、海外でも紹介されました。

新たな進展へ

産技研では現在、多岐にわたる文化財分析や解析への対応を目指し、他にはない優位性を確立するため金属材料、無機材料、天然高分子材料、繊維材料の分野横断的に対応できるプロジェクトチームを令和4年10月に結成しました。これまでの経験・知見に加えて、より多様で高度な科学的分析データに基づく修復や文化財修復のための用具や原材料の確保などにも寄与していきます。

(プロジェクト推進室副室長 廣岡 青央)



複製品(左)と木造地蔵菩薩坐像(右)

バイオものづくり分野におけるDX推進

バイオものづくりとは微生物や動植物等の細胞を活用することにより、化学素材、燃料、医薬品、化粧品、食品等、様々な産業分野で利用される材料を生産する技術です。産技研では、高性能な計測機器を活用する分析技術を基盤として、醗酵・食品などのバイオ分野における現象を計測により数値化し、目的に応じた解析まで支援することで、バイオ産業に関わる事業者の「計測のDX化」を推進しています。

本事業では、計測データの解析をネットワーク上で行うことができる環境の整備を進めるとともに、実習を伴う講習会を通じたデータサイエンティストの養成にも取り組んでいます。DX推進により地域のバイオものづくりに貢献していきます。ご期待ください。

(プロジェクト推進統括 名所 高一)



Go-Tech事業（経済産業省）に2つのプロジェクトが採択

Go-Tech事業は、高度な技術開発への挑戦、基盤技術を活用した高付加価値製品の製造、ものづくりとAI、IoT等の先端技術を融合させた高度なサービス開発等を支援する経済産業省の補助事業です。本事業に採択されたことを契機に、京都のものづくり産業をより一層支援してまいります。



Go-Tech 事業
(成長型中小企業等研究開発支援事業)

環境調和素材の研究開発で持続的循環型社会の実現に貢献する

連携：FES株式会社、同志社大学

環境配慮型の難燃性軽量低コスト 壁面装飾建材を実現する3Dプリンター 成形用粉体材料の開発

バイオフィラーと難燃化技術を駆使し、新規3Dプリンター材料とその成形加工技術を創生します。軽量化、難燃化により、安全・安心、かつ低環境負荷で意匠性の高い立体構造物の造形を3Dプリンティングにより可能とする本技術の確立により、住宅やホテルなど従来設置が難しかった場所への活用が期待できます。

高度な分析技術を駆使して感染症医療に貢献する

連携：株式会社ビークル（令和4年度“目の輝き”認定企業）

B型肝炎治療ワクチンで利用する C抗原の製造技術の開発

新たなワクチンの材料となるB型肝炎ウイルスのC抗原について、医薬品原薬として利用可能なグレードの製造法（培養法、精製法、分析法等）を完成させることを目的としています。完治可能な治療法がないB型肝炎を始めとする感染症医療に貢献することを目指しています。

近畿経済産業局管内
採択プロジェクト一覧（通常枠） →



産技研にある機器のスゴイところを紹介します！

産技研が保有する機器は、HPにてご紹介しています。 →



髪の毛よりも細いビームで分析！？

名称：電子線マイクロアナライザ（EPMA（イービーエムエー））
製造：日本電子株式会社

この機器でできること

電子線を試料表面に照射し、そこから発生する二次電子、反射電子、特性X線を波長分散方式で計測することにより、高精度かつ高分解能な元素分析が可能です。（数μm（0.001mm）オーダーの微小領域から数mmオーダーの広領域まで対応可能）

こんな時に役立ちます

- 表面の状態を知りたい
材料や製品（金属、セラミックスなど）の表面を100倍～5000倍で観察することで、品質の改善、トラブルの原因究明につながります。
- 表面処理のプロセスを改善したい
浸炭、窒化及びめっきの膜厚や元素分布を計測することで、適切な表面処理が行われているかを確認することができます。
- 新たな素材開発をしたい
適切な前処理を行うことで、元素濃度分布を確認することができます。適正な状態かどうかを知ることで、素材開発などに役立ちます。

お知らせ

(産技研の最新情報はwebサイトへ)



常設エリア

京都が誇る伝統産業の振興拠点

「京都伝統産業ミュージアム」の紹介

みやこめッセ地下一階の本ミュージアムは、令和5年9月1日(金)から観覧料を設定し、ミュージアムの機能充実、職人実演・ブチ製作体験の導入、新しい工芸品を生み出す職人を応援するなど、産技研とも連携しながら伝統産業業界支援に努めています。

ミュージアムにおける新たな取組

- ・ 常設展示場に新たな展示コーナーを設置
- ・ 工芸品や職人とふれあう機会の拡充
- ・ 案内・解説機能の強化
- ・ 岡崎地域の他施設との連携

観覧料等詳しくは、HPをご確認ください。



Web

『漆Lab. ～感性とサイエンスが繋ぐものづくり～』

産技研が支援する若手職人・作家とその背景にある漆の世界を紹介する展覧会を開催

会期：令和5年10月28日(土)～11月8日(水)

会場：MOCADギャラリー(無料)(京都伝統産業ミュージアム内)

主催：産技研

共催：京都市、京都伝統産業ミュージアム

令和6年3月31日まで

MOCAD ONLINE SHOP 特集「漆Lab.」→



講習会・セミナー

評価技術講習会

- ・ 素材・粉体制御評価シリーズ

11月16日(木) 走査電子顕微鏡観察：
繊維系・デジタルマイ
クロスコープ

12月7日(木) 電子線マイクロアナ
ライザ

令和6年

1月19日(金) レーザー顕微鏡測定

- ・ 微量分析シリーズ

2月、3月に開催予定



京都バイオ計測
センターでは、
分析技術の講習会を
開催します。



こんなイベント開催しました！！

KRP フェスでPCR 実験や「リサイクル金」の紹介など、 科学を楽しく知るイベントを開催！

京都リサーチパーク 夏のイベント「KRPフェス」が今年も開催されました！

産技研では、小学生が対象の「あつまれ！こども調査団」(7月24日)、バイオ計測センターによる「PCR 実験」(7月28日) やスタンプラリーなど盛りだくさんなイベントを行いました。

「あつまれ！こども調査団」では、京都マラソンの優勝者に授与される「リサイクル金」を使用した金メダルができるまでを紹介しました。この金メダル、実は、毎年産技研で金めっき加工を行っています。全て金でできた金メダルと、銅メダルの上に金めっきをした金メダルは、どちらが重いですか？どちら安いですか？そんなクイズも出しながら、製作過程をお伝えし、めっき技術の価値とレアメタルのリサイクルの大切さについての解説を行いました。メダルを間近で見ると好奇心と探求心いっぱい目を輝かせる子ども達の姿がとても印象的でした。

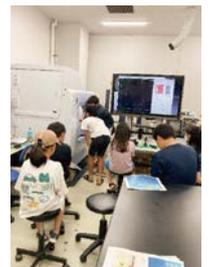
夏のサイエンススクールを開催！(8月7日)

小学生に科学の楽しさや不思議を体験してもらう実験イベントを京都市立京都工芸高等学校と連携して開催しました。同校サイエンスクラブの高校生が先生となり、食パンに使われるイースト菌とジュースに含まれる砂糖によりオルゴールを鳴らす実験や、産技研のX線CTシステムを使って職員と一緒に物の内部を透視する体験を行いました。

いきいきとした表情で実験する子供達にとってこのイベントが科学に興味を持つキッカケになればと思います。



KRP フェス あつまれ！こども調査団



夏のサイエンススクール

コラム

産学公連携

産学公連携は平成7年度の「科学技術基本法」に記載されて以来、国の重要な政策となっています。

私自身は、平成14年に策定された京都バイオシティ構想を実現するため、公益財団法人 京都高度技術研究所と共に、地域企業の要望に応え、企業単独では獲得できない技術・知見を提供いただける大学や公的研究機関の先生方を探し、企業とアカデミア（大学や国の研究機関）の要望をすり合わせ、Win-Winの関係に整理する仕事、いわゆるコーディネーター業務に携わることができました。案外、産学で完全にマッチングすることは少なく、欠けている技術や知見は公設試である産技研で引き受けてきました。そして地域産業活性化を導く

プロジェクトとして産学公連携を形成しています。

先端の研究成果が産業に展開していく過程は意外性もあり、それが製品になったときには感慨深いものです。産技研もその過程を担い、支援してまいります。



山本 佳宏

研究室長・プロジェクト推進室長

入所 : 1994年

専門分野: バイオ

研究 : ライフサイエンス

応用生物化学

「京都市産業技術研究所 web サイト」使いやすく、見やすくリニューアル！

より多くの方に産技研を知っていただき、利用していただくため、公式webサイトをリニューアルいたしました。

今後も、産技研が市民・事業者の皆様に信頼いただける機関であり続けるため、情報発信に努めてまいります。



Web



POINT 1

わかりやすいメニュー表示や階層構成！

「知る」「相談・依頼する」「学ぶ」「共創する」「成果・事例」で構成。利用者の声、活用事例集なども掲載しています。

POINT 2

「京都市産業技術研究所 magazine (web版)」を新設

広報誌の記事のほか、イベントレポートやインタビューなど、地域企業や産業技術にまつわる記事を掲載していきます。

POINT 3

ユーザビリティの向上

スマートフォンをはじめあらゆるデバイスから閲覧しやすくなりました。

編集後記

vol.2となる本誌はいかがでしょうか。また、創刊号の発行後に、色々のご意見を多数いただきありがとうございました。いただいたご意見を基に、本誌誌面の細部や記事構成のブラッシュアップをしています。些細にも見えるこだわりや発見の積み重ねが、皆様とのつながりをもっと深くさらに拡げていける一歩となれるよう、これからも皆様のご意見を大切にしながら引き続き編集してまいります。本誌vol.2につきましても、たくさんのご意見をお待ちしております。



アンケート

知を拡げ、文化を描く

京都市産業技術研究所 magazine vol. 02

令和5年10月27日発行

発行 : 地方独立行政法人 京都市産業技術研究所

〒600-8815

京都市下京区中堂寺粟田町91

京都リサーチパーク9号館南棟

発行予定 : 年3回(6月末、10月末、3月末)

京都市産業技術研究所は、伝統産業から先進産業まで、地域企業を技術面から支援する公的な産業支援機関です。

創設から100年余り。ものづくり技術の向上に取り組む事業者の挑戦を支援してきました。そこで生み出された技術が生活の中に浸透し、やがて新しい文化が生まれます。

私たちは、技術と文化でイノベーションを起こすまち「京都」を地域企業とともに築いていきます。



Web



Facebook